2021.01.29

松沢哲郎のこと(5)

小嶋祥三

霊長類の共通祖先から、ヒトを含む様々なサルが枝分かれして、現在に至っている。ヒトとチンパンジーなど大型類人猿は同じヒト科に属し、もっとも最近に分かれた。したがって、ヒトとチンパンジーが似ていること、共通の要素をもつことに、何の不思議もない。わたしは、多くの研究者と同様、ヒトとチンパンジーは似ているが異なる種であると考えている。そのような立場で、霊長類と関わってきた。わたしはチンパンジーの聴覚と音声の研究をした。ヒトの音声言語が興味の背景にあった。そして、ヒトとチンパンジーの差異を検討した。その中に音声言語を可能にした要因があると思ったから。差異であって優劣のような価値的な面に興味があったのではない。

わたしが思うに、松沢はヒトとチンパンジーの差異よりは、ヒトに類似する面、高い能力、優れた面に興味があった。価値が研究の前面に出ているように感じられた。このような問題の設定は、松沢の性格が深くかかわっているように思う。チンパンジーは「すごい」ことができる、というのは彼にぴったりのテーマだったと思う。ただ、わたしはチンパンジーのいわゆる言語研究で、チンパンジーの高い能力は十分に示されたと思っていた。しかし、それはヒトが引き出したチンパンジーの能力だろう。チンパンジーが学習した図形語も手話もヒトが開発し、系統立てて教えたものだ。この点は、チンパンジーの言語研究が盛んであったときから問題にされていた。

多くの霊長類の研究者は上記の動物の系統分類を認めていると思うが、一般の人には馴染みのないものだったかもしれない。松沢の主張は、これまで一般の人が考えてきたであろう、ヒトとそれ以外のサルという分け方、言い換えると、ヒトが特別であるという考えを否定することになった。ただ、ヒトとチンパンジーが似ていることを強調するあまり、ヒトとチンパンジー、ボノボ（大型類人猿？）とそれ以外のサル、という新しい二分法として、一般の人、一部の研究者に受け取られないか心配だった。それでは境界線が移動したに過ぎないではないか。ある発達心理学者が、霊長研でチンパンジーの実験を見学した。その時チンパンジーが実験室で排尿をしたことに驚いていた。チンパンジーは、ヒトの幼児と同様に、トイレット訓練も行われていると思ったのだろう。研究者でもこの理解である。いわんや一般の人においておや、である。松沢の主張には霊長類研究のこの新しい二分化が含まれていることを危惧する。それは、霊長類研究を分断し、霊長類の総合的研究という霊長類学、霊長類研究所（霊長研）の基本的な理念、方針に反するものだから。

松沢は霊長研のフィールド関係の施設を廃止して、京都に野生動物センターをつくった。これは尾池総長の時のことと思うが、松沢は尾池氏を日本モンキーセンターの理事長に迎えるなど、それなりの対応をしている。フィールドの施設を提供した、霊長研のフィールド研究者はポストを期待していたかもしれない。しかし、霊長研のフィールド研究にはほとんど利益がなかったように思う。看板に「野生」とあるが、松沢の興味がフィールド研究にあ

ったようには思われない。事実、野生センターでは飼育下のチンパンジーの研究の比重が大きい。わたしには、霊長研のフィールド研究者がなぜこのような変革に賛成したのか、理解できないでいる。これでは単に利用されただけのように見えてしまう。松沢は、野生動物センターの設置により、自由にふるまえる環境を得たように思う。それが今回の研究費の不正の一因になったのならば、残念である。わたしは野生動物センターが、上記の新二分法の組織的な基盤になることを危惧している。